

相談者の思いを受け止め、思いを引き出す教育相談のために ～学校全体の教育相談力の向上を目指して～

令和7年度山形県教育センター長期研修生（前期6ヶ月）
山形県立楯岡特別支援学校寒河江校 笹原 祥子

1. 研究のねらい

私は、特別支援学校小学部に勤務し、校務分掌として教育相談を担当している。校種の特性上、児童生徒本人への教育相談よりも、保護者との相談の機会が多い。その中で、教育相談の難しさを強く感じる場面が多かった。ベテランの教員や相談部に所属する教員の相談場面を見ると、保護者の思いや状況を的確に受け止め、スムーズに相談を進めていく姿があり、教員歴や経験によって教育相談の捉え方や進め方に差があることを実感した。そして、教員歴や経験による差を埋める取り組みが、学校全体としての教育相談力の向上につながるのではないかと考え、本研究に取り組むこととした。

2. 研究の方法

（1）アンケート調査

県内の特別支援学校9校の小学部に勤務する教員を対象に、教育相談に関する意識や課題感、研修の機会や学びたい内容に関するアンケートを実施し、教員歴別に分析を行った。

（2）実践研究（校内研修会の実施）

校内で全2回の研修会を企画・実施した。

第1回：講義形式を中心に、カウンセリングの手法を取り入れた教育相談の基礎知識について共有した。併せて、これまでの取り組みを振り返り、カウンセリング的視点から再評価する時間を設けた。

第2回：演習形式で、保護者との相談場面を想定したロールプレイを実施した。第1回のアンケートで寄せられた疑問や要望も踏まえながら、1回目と継続性をもたせた内容とした。

いずれの研修も、異なる教員歴の教員が共に学び合う場とし、お互いの経験や知見を共有しながら学び合うことができるように、ペアワークやグループで意見を共有する時間を意図的に設けた。

（3）聞き取り調査

県内特別支援学校のうち、教員数の多い3校の相談部長を対象に、巡回相談や学校の実態についての聞き取り調査を行い、情報を収集した。

3. 研究の結果と見えてきた課題

（1）アンケート調査

保護者との教育相談に関する教員の意識を明らかにするためのアンケート調査を実施した結果、教育相談を「つながる」「引き出す」「つなげる」の3段階に分けたとき、どの段階で難しさを感じ、どの段階を意識しているかは、教員歴によって異なる傾向が見られた。また、学びたいと考える内容にも教員歴による違いが見られた。

若手だけではなく、ベテラン教員であっても悩みや難しさを抱えながら相談に臨んでいることが分かった。そして共通して、「より良い教育相談にしたい」「そのために学びたい」という意識がすべての教員歴層に存在していた。このことから、経験豊富な教員が経験の浅い教員に一方的に教えるのではなく、互いの強みや工夫を共有し、補い合う形で学びを積み重ねていくことが重要であると考えた。

（2）実践研究

第1回の研修会では、これまでの実践をカウンセリング的視点で捉え直すことで、現段階で教員たちが「できていること」「これから伸ばしたいこと」が明確になった。「コンプリメント」に関する演習では、各教員が教育相談で意識している点を可視化することで、自分自身の取り組みを価値づけ、他の教員の有効な関わり方や働き掛けの仕方を共有し、吸収し合う機会となった。

第2回の研修会では、学校での新たな取組である「さがえっこはぐくみサロン」を意識し、担任外の教員と保護者が向き合う場面を想定してロールプレイを行った。「教育相談の流れや意義を改めて確認したことで、相談に向かう姿勢が変わった」という肯定的な意見が複数寄せられた一方で、「研修内容とサロンの目的にずれがあった」との意見もあり、研修と学校での取り組みとの接続に課題が残った。

（3）聞き取り調査

巡回相談に関する聞き取りからは、各学校で巡回相談にあたる教員に配慮した体制づくりを行っていることが分かった。どの学校でも経験豊かなベテラン教員が中心となり、OJT的に若手にノウハウを実践の中で伝えている現状が確認できたが、相談部長からは「日々悩むことが多い」「難しいケースを主に担当することに不安を感じる」といった声も聞かれた。ベテラン教員にばかり負担がかかる体制では限界があり、全教員で教育相

談力を高め合う仕組みづくりの必要性が感じられた。

4. まとめ、今後に向けて

今回の実践研究では教育相談の基礎を確認し、相談者が自分の思いや解決策に気付く過程の重要性に焦点を当てた研修会を計画し、実施した教育相談を自分事として捉えながら、思いを引き出すための関わり方や進め方などを講義や演習を通して学ぶことができていた。しかし、巡回相談の場面を考えてみると、どの学校においても児童生徒への対応に関する漠然とした悩みだけではなく、具体的な支援のアイデアを求める相談も多く寄せられていた。こうした場合には、試せる支援のアイデアを複数提示し、その中から相談者自身が選択し、試行できるように支援することが求められる。そのためには教員が多様な実践例や工夫を共有し、共に検討し合う場を継続的に設けていくことが必要となる。今回の研修では、上記のような巡回相談の視点や実践的支援の在り方について十分に扱えなかった点が課題として挙げられる。

また、本研究で扱った研修の効果は、教員自身の振り返りに基づく主観的な評価にとどまっている。教育相談の有効性は、相談後に子どもの行動が良い方向に変容したり、保護者の子どもへの関わり方や意識が変化したりすることによって示されることが考えられる。しかし、こうした変化は一定の期間を経て表れるものであり、今回の研究期間内にその変化を十分に捉えることが難しかった。この点も同様に今後の課題であり、相談後の継続的なフォローアップを含めた観察や検討が必要である。

教育相談が、相談者にとってよりよい時間となるように、教員歴も経験も異なる教員同士がこれまでの経験や視点を持ち寄り、学び合う場を積み重ねていくことが大切であると感じる。研修会という形に留まらず、「学び合い」の視点を大切にしたい短時間のケース会やペアトーク等も、相互の学びを促進する有効な方策の一つとなり得る。教員歴や経験が異なる仲間同士が互いの良さを吸収し合いながら高め合うことで、学校全体が「この学校に相談して良かった」と思ってもらえるような教育相談の実現が期待される。

5. 調査研究協力校

(1) アンケート調査の実施

- ・山形県立楯岡特別支援学校本校
- ・山形県立楯岡特別支援学校寒河江校
- ・山形県立村山特別支援学校本校

- ・山形県立村山特別支援学校天童校
- ・山形県立村山特別支援学校山形校
- ・山形県立山形養護学校
- ・山形県立山形盲学校
- ・山形県立山形聾学校
- ・山形県立ゆきわり養護学校

(2) 巡回相談担当者への聞き取り

- ・山形県立楯岡特別支援学校本校
- ・山形県立村山特別支援学校本校
- ・山形県立山形養護学校

(3) 校内研修会の実施

- ・県立楯岡特別支援学校寒河江校

6. 引用・参考文献

○全体を通して

- ・文部科学省 教育相談等に関する調査研究協力者会議（2009）『児童生徒の教育相談の充実について一生き生きとした子どもを育てる相談体制づくりー（報告）』
- ・文部科学省（2022）『生徒指導提要』
- ・文部科学省 中央教育審議会（2021）『『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて』
- ・大塚弥生（2021）「教育相談に向けた教員の態度養成ーナラティブ・アプローチを取り入れた教育相談研修ー」南山大学教職センター紀要（8）
- ・黒沢幸子（2002）『指導援助に役立つスクールカウンセリング・ワークブック』金子書房
- ・角田真紀子（2019）「教師の「教育相談」の在り方と方法についての比較的検討：文部省・文部科学省の資料を中心とした教師の「態度・姿勢」に注目して」専修大学人文科学研究所月報 302 53 頁～90 頁
- ・中島正雄（2012）「教師の教育相談研修に関する研究」神奈川大学心理・教育研究論集 第 32 号
- ・福永名津・瀬戸健一（2020）「教育相談研修の研究ーショートストーリー法に着目してー」三重大学教育学部研究紀要 第 71 巻 教育実践（2020）503 頁～514 頁
- ・森俊夫（2000）『先生のためのやさしいブリーフセラピー』ほんの森出版
- ・森俊夫（2001）『“問題行動の意味”にこだわるより“解決志向”で行こう』ほんの森出版

○アンケート調査

- ・大井雄平（2022）「教育相談の今日的意義、課題と展開」
常葉大学教育学部紀要（43）105 頁～111 頁
- ・笠井孝久（2015）「教育相談に対して教師が直面する困難」
千葉大学教育学部研究紀要 63 187 頁～197 頁
- ・春日由美・長谷和久・阿濱茂樹・池永亜由美・大園悦子・河原咲子・来島芳子・宮田帆乃香（2024）
「教員の教育相談の資質修得過程と教育相談の具体的工夫」
山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第 58 号
- ・春日由美・三原菜綸（2022）「教員における保護者との信頼関係づくりー教員と保護者双方への調査からー」
山口大学教育学部研究論叢 第 71 巻 31 頁～40 頁
- ・春日由美（2018）「教師の教育相談に関する困難感および自他意識との関連に関する一研究」
南九州大学人間発達研究 南九州大学人間発達学部 編 8 57 頁～65 頁
- ・久米禎子（2022）
「学校教育相談に求められる能力と研修ー教師自身が捉える教育相談及び教育相談研修の現状と課題ー」
鳴門教育大学学校教育研究紀要 36 21 頁～28 頁

○実践研究

- ・鹿児島県総合教育センター（2016）「指導資料 教育相談第 136 号 信頼関係を築く保護者相談の在り方」
- ・春日由美（2016）「教師の教育相談的資質向上研修における効果研究」
南九州大学人間発達研究 南九州大学人間発達学部 編 6 63 頁～70 頁
- ・金山元春・中川真身（2016）「教員のリソースを喚起する教育相談研修の試み」
教育カウンセリング研究 7（1）59 頁～68 頁
- ・勝田みな（2021）
「教育相談における現状と課題ー保育者・小学校教員養成校の学制が身に付けておきたい対応とはー」
名古屋経営短期大学紀要 第 62 号 17 頁～29 頁
- ・小松茂（2017）「教師教育における教育相談及び事例研究の意義」
立命館教職教育研究紀要 83 頁～89 頁

- ・桜井美加・齋藤ユリ・森平直子（2016）『教育相談ワークブッカー子どもをはぐくむ人になるために【新版】』北樹出版
- ・生井光治（2025）『保護者対応 信頼はぐくむ教師の「聞く力」』学芸みらい社
- ・浜内彩乃（2024）『ステップアップカウンセリングスキル集ー今さら聞けない 1 2 の基礎技法』誠信書房
- ・諸富祥彦（2022）
『先生のための保護者相談ハンドブッカー配慮を要する子どもの保護者となつながら 3 つの技術』学苑社
- ・米田薫（2002）「教育センターにおける教育相談研修に関する研究」
教育カウンセリング研究（2）1 26 頁～33 頁
- ・渡部昌平（2018）「教育相談にブリーフカウンセリングとリフレクティングチームを導入する効果」
教育カウンセリング研究 9（1）53 頁～56 頁

○聞き取り調査

- ・足利市立教育研究所（2013）『学校における教育相談ハンドブック』
- ・春日由美・小野陽子（2022）
「教員における教育相談及び教員自身の相談することに関する意識」
山口大学教育学部研究論叢 第 71 巻 21 頁～30 頁
- ・豊岡崇志・石津憲一郎（2017）「教育相談体制の充実についての検討ーカウンセリング指導員の役割に注目してー」
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 第 12 号 53 頁～68 頁
- ・宗形奈津子（2022）『特別支援教育の巡回相談員の仕事』 デザインエッグ株式会社